

第一章 序論

第一節 研究の目的

日本書道史上、現存最古の肉筆文字資料は、伝聖徳太子筆として名高い『法華義疏⁽¹⁾』である。

『法華義疏』の伝称筆者である聖徳太子は推古天皇を支え、実質的な為政者として、日本の国家的基礎を築き、仏教に深く帰依していたことが知られている。聖徳太子の仏教に対する信奉の度は、多くの文献資料がそれを伝えているが、中でも、仏典の解釈に関して『三経義疏』を撰し、『維摩経』、『勝鬘経』、『法華経』の註釈を行い、勅に応じ、推古天皇の御前にて講義を行ったとの様々な記述⁽²⁾は、太子の信仰が並々ならぬものであったことを我々に想起させるものとなっている。

法隆寺には、古来より⁽³⁾、聖徳太子筆とされる「法華経疏、四卷」が伝世しており、本研究において取り上げた『法華義疏』四卷は、これに相当する。『三経義疏』の内、原本とされる遺品が存在するのは、この

(1) 「疏」は漢音では「そ」、呉音では「しよ」の発音となる。花山信勝校訳「法華義疏(下)」(『岩波文庫』、1976年)390頁 解説の中で『法華義疏』に対し、「ほっけぎしよ」のルビがふられている。

(2) a 是歳。皇太子亦講法華経於岡本宮。天皇大喜之、播磨國水田百町施于皇太子。「日本書紀」(『國史大系 第一卷下』吉川弘文館、昭和四十二年)148頁

b 同年秋七月。天皇詔太子曰。於朕前講說勝鬘経。則依詔太子講経三日。「法隆寺東院縁起」(『奈良六大寺大観 五』岩波書店、1972年)107頁

c 即造法華等経疏七卷。戊午年四月十五日。少治田天皇請上宮王。令講勝鬘経。「上宮聖徳法王帝説」(『大日本仏教全書』、名著普及會刊 昭和五十九年復刻)44頁

d 然勝鬘経未具其説。宜於朕前講説其義。太子辞奏。臣頃將製疏。……天皇答勅。試講令諸名僧大徳問其妙義。太子受天皇請。……天皇復勅太子曰。法華経者。如来妙義。宜亦講説。太子謹受。亦如僧儀。説岡基宮。「聖徳太子傳曆上卷」(『大日本仏教全書』名著普及會刊 昭和五十九年復刻)24~25頁

e 己巳四月八日。始製勝鬘経疏。辛未三八年正月廿五日了。壬申三九年正月十五日。始製維摩経疏。癸酉九月十五日了。甲戌十一年正月八日。始製法華経疏。乙亥十二年四月十五日了。「上宮聖徳太子傳補闕記」(『大日本仏教全書 聖徳太子傳叢書』名著普及會刊 昭和五十九年復刻)4頁

(3) a 法華経疏參部各四卷。維摩経壹部三卷。勝鬘経疏壹卷。「法隆寺伽藍縁起並流記資材帳」(『大日本古文書 編年之二』大日本圖書株式会社、明治34年 東京大学出版會、昭和43年復刻)18頁

b 法華経疏肆卷…右上宮聖徳法王御製者「法隆寺東院縁起」(『大日本古文書編年之二』大日本圖書株式会社、明治34年 東京大学出版會、昭和43年復刻)107頁

『法華義疏』のみであり、法隆寺の寺院史のみならず、広く飛鳥時代の文化を知る上での貴重な資料である。

『法華義疏』には、四巻全体を通じ、改訂、補筆、修正、貼紙といった箇所が散見する。随所に見られるこれらの箇所は、単なる文字の書き誤りを越え、註釈を附していく上での、執筆の過程をそのままに伝える、重要部分である。草稿本と称されるのも、こうした遺品の現状に起因するところが大きい。

本研究では、このような背景を持つ『法華義疏』に対し、書風の分析を行い、遺品についての新たな解釈を行う。書風の分析に関しては、『法華義疏』に見られる改訂、補筆、修正、貼紙といった箇所に注目し、丹念に調査を行った。その結果、『法華義疏』の中に、別人の筆跡による箇所、異筆があると判断し、書学においてこれまで論考が加えられてこなかった、新たな解釈を展開する。先行研究に比して、本研究の独自性を示すものであり、これは、本研究の第一の目的である。

また、補筆、修正といった改訂は、註釈の課題、重点であるが故に行われるのであり、『法華経』解釈の論点に対して、筆者が試行錯誤し、慎重に行われたものであると考える。本研究において異筆と判断される箇所は、『法華義疏』の内容解釈の面から考えた場合に、如何なる存在であるのか。これに関し、先行研究に対する調査を行った結果、異筆と判断される箇所は、同時に、『法華義疏』の内容を考釈する上での重要部分に該当していることが判明した。『法華義疏』の研究においては、書風分析の結果と内容解釈が密接な関係にある。このことに着目し、解釈の重要部分について論ずることで、書風分析が及ぼす影響の大きさについて言及する。

これは、書学の重要性と意義を明らかにするものであり、関連性の

中に書風分析の意義を見出すという、新たな研究方法論の提示となると考える。書学における様式論の展開として、本研究の目指す方向であり、第二の目的である。

更に、書風分析と内容解釈の関連を明示するためには、相関関係の構造を明確に表現し、論文に反映させる、方法論が必要である。そこで、本研究の分析結果が他に及ぼす影響を論文中の仮説として扱うことで、論文の形式を整え、論証のための立脚点とした。書風分析の意義を解釈との関連性の中に見出し、論文の形式として明確に表現し、定着させるという手法は、書学において見られず、新たな様式論の確立となると考える。これが、本研究の目指す、第三の目的である。

上述してきたような、研究目的の進行を支え、詳細な書風分析を行うためには、資料の活用に関する、作業方法の具体的な検討が避けられなかった。これは、本研究を進める上での大きな課題であり、問題点もあったが、検討の結果、『法華義疏』を画像データ化して運用する、「法華義疏画像データベース」を構築することとし、作業を経て、研究環境を整備した。

本研究においては、画像データ収録の過程で、データベース構造に改編を加え、書風分析のためのツールとして繰り返し運用した。更にまた、本論を展開する中で、データベース収録の画像資料を使い、論証を行っていく。これを通じ、本研究の書風分析に、データベースの利用が不可欠であったということを示すことができれば、第四の研究目的であるデータベース構築の意義が達成されるものと考ええる。

第二節 研究の背景

日本書道史を広く通観するに、現存する遺品の数が少ないのが、飛鳥時代である。そればかりか、限られた遺品の大部分が金石資料であるため、日常使われていた文字の様相を正確に知ることは非常に困難である。こうした中、四卷全体でほぼ十万字という、大量の文字資料群である『法華義疏』は、当時の日本の書を理解するための貴重な研究対象である。これまでも、その重要性は広く認識されてきたが、紙面の切り継ぎ、貼り付けという箇所が多いからか、筆者が鑑賞対象となるよう、芸術性を強く意識して書いたものではないため、書法研究の対象として取り上げられる機会は比較的少なかった。

しかしながら、日本書道史の流れから見れば、『法華義疏』が比定されている飛鳥時代以降、日本では、中国から取り入れた漢字を転用することによって、独自の仮名文化を創り上げていくという、大きな文化的変化を遂げる時でもある。日本の書はこれまで、常に中国の書の影響を受けて発展してきた。仮名発生以前の、日本の漢字文化の受容を明らかにする上で、紙本墨書の大量の文字資料群である『法華義疏』は、日本書道史上、珍重すべき遺品であり、書風解析の視点より欠く事がない。

『法華義疏』の伝来に関しては、天平宝字五年(761)の『法隆寺伽藍縁起並流記資材帳』に、「法華経義疏肆卷。正本者。秩一枚著牙。律師行信。覓求奉納者⁽⁵⁾。」とあり、行信が寺院復興の時に、法華経の註釈書を寺外より求めて奉納したことが知られているが、現存する『法華義疏』がこの記述に見られるものであるとすれば、法隆寺再建論を書跡の

(5) 『法隆寺伽藍縁起並流記資材帳』(『大日本古文書 編年之二』大日本圖書株式会社、明治34年 東京大学出版會、昭和43年復刻) 511頁

上で裏付ける資料ともなる。

また、『法華義疏』が依拠した経典は、現行二十八品として成立する以前の、『提婆達多品』を欠いた二十七品の『法華経』であり、これは日本の仏教移入の時代性を示している。このように、『法華義疏』は、日本書道史のみならず、仏教移入の推移、伝称筆者である聖徳太子に関しての歴史的動向、法隆寺の再建など、日本の飛鳥時代とその後を知る上での重要な研究対象である。

本研究で取り上げた『法華義疏』の研究ばかりでなく、書学においてはこれまでも、歴史的意味を持つ貴重な遺品が研究対象となり、論述を加えられてきた。しかし、論述の内容は、遺品の持つ背景、作品成立の過程及び伝世保存の周辺事情にその多くが割かれている。書は文字を素材にしているため、文字という記号によって伝達される意味内容、言語的側面と、線を使って表現される造形意識の二つの側面は密接な関係にあるはずであるが、二つの方向が有機的な関係性を保ったまま、論証されていくという方法は未だ確立されていない。書学においてはこれまで、文字の形に関する解説と、作品背景の文献操作という二つの方向のどちらか一方に比重を置いた形での論述が主であった。これは、書の芸術性を信頼するあまり、真偽の判定など価値基準が芸術性に集中し、論述の目的を限定させてしまっていたためではないかと思われる。また、書学において芸術性を表現する手法は、未だ試行錯誤の段階にあり、共通性のある普遍的な言語体系を持ち得ていないため、芸術性の高さに論点を集中させると、解説が混迷を深める。そのことが芸術性に不案内な他の分野の理解を遠ざけ、書を、説明の不明瞭な把握しがたいものにしていただけないかと思われる。そればかりでなく、名品を追い求めてそれに偏重すれば、書学において議論に上らない遺品が増えることにな

り、それは文字という素材全体の広がりから考えた場合には、却って説得力を失い、やがては名品の実相をも見誤りかねない危険性を孕んでいると思われる。

本研究の研究対象である『法華義疏』は、正にこうした状況を反映していると言える。書道史の中には、天下第一の神品と謳われる遺品の中に、王羲之の『蘭亭序』、顔真卿の『争座位稿』のように、草稿本でありながらも自在な表現を見せ、高い評価を得ている遺品が存在している。それらに対し、『法華義疏』は全巻を通じて、一貫した書きぶりで筆を進めており、表現の多様性に欠けるため、芸術作品として取り上げられる機会は少なかった。それゆえ、歴史的に貴重な遺品であると認識されながらも、書風に関する研究が大きな進展を見せず、書学においてあまり検討がなされてこなかったのである。

しかし、研究の視点と方法論が変われば、取り上げられる対象もこれまでとは変わってくる。本研究では、『法華義疏』の研究を通して、こうした問題への一つの視座を示すことを目的としている。

それは、文字の形を、時代の要求した必然の造形表現として捉え、時代の要求を文字の形の中から取り出すことで、内在する情報の各々を解析し、因果関係の中でそれを論証していくという方法である。文字の形の違いは、作品の優劣の判断基準ばかりではない、歴史的意味を持つ一つの事象であるということを、新たな視点として様式論の中心に据える。そして、文字の形を分析していく中で、関連事項への影響を論証し、時代相の一側面を示していくという研究の方向性である。これにより、名品に集中した書道史の流れを見直し、歴史的意味の相関関係の中で様式を明らかにしていくことにより、改めて書の位置と重要性が浮き彫りにされるものと思われる。

更に、こうした作業を続けていくことで、やがては芸術性を論じる共通の表現方法が成熟し、様式論が体系化されていくのではないかとと思われる。これまで、言語を以って、芸術性を表現するような場合には、能弁であることが解説の範であった。その優れた芸術性について語るためには、作品のすべてではなく、或る一部を深く鑑賞すれば事足りていた。象徴的な部分に焦点を当てて論ずることにより、解説は可能となる。しかし、歴史的必然性を明らかにする場合は、広い範囲にわたる詳細な様式分析が必須となる。多くの資料を使い、実証的に研究を進め、更に、論文の構成は、多面的傍証として多くを羅列するのではなく、論証の過程を整えることで具体的手順として表現する必要がある。

本研究では、『法華義疏』の研究を通し、作品の芸術性ではなく、歴史的必然性を問うという方法論を採用する。見方を変えることで論点を検討し、それに関する綿密な調査を行う。その結果導き出された結論、そして起首となった視点、更に行われた調査を論証の過程として論文構成に反映させる。その実証的方法によって様式論とし、書学に対する新たな提言としたい。そのことが書学における本研究の位置づけになると考える。

上述のような方法論で本研究を進めるにあたり、文字様式の精緻な分析が必要となり、それを実現させるために、文字を画像データとして入力し、運用するデータベースの構築を行った。

文字という、日々に根ざした素材を研究対象として扱いながら、他の分野の研究者に対してなお、書が開かれたものにならず、その特異性だけを指摘されるという現在の状況を考える時、データベースを通しての文字資料の運用は、書を理解する上で、情報の共有性を高め、それが今後の書学における一つの指針となるのではないかと考える。

近年、情報処理関係の技術開発は急速な進展を見せ、学術分野においても活発な利用が定着化しつつある。こうした状況下でありながら、しかし、現在の書学を取り巻く環境は非常に厳しいものである。書学において、情報処理関係の利用が具体的な進展を見ていないのは、いくつかの理由が考えられるが、まず、書風の分析を行うためには、画像データの膨大な処理が必要とされ、書と情報処理の両面に造詣が深い研究者の存在が極めて希少であったという背景がある。また、ワープロに代表されるような機能が、文字を書くという行為から人々を遠ざけるため、積極的な利用が行われなかったという事情が考えられる。これらは分野の特質であると思われるが、こうした先入観の中で傍観している中、しかし、コンピュータ利用の現状においては、文字という素材が、広範な領域において様々に求められている。これらの期待に答えていくことで書の特異性が示されることも考えられる。今後、情報処理技術が書学の発展を促す有効な道具になることを期待する。

更に、先に述べたように、書学においては研究方法論に関し、未だ試行錯誤の段階にある。これまでの書学においては、作品の成立背景に関する文献操作が重点的に行われてきている。また、文字の様式については、芸術性を論じ、真偽を判断する内容が主となっている。様式解説の場合には、問題となっている或る一部分を抜粋し、それに対して論述を加えるという方法がとられた。膨大な資料を一括して整理し、提示するということは、切迫した問題として捉えられておらず、そのため、分析に必要なシステムが火急の条件として要求され、認識されてこなかったという現実があげられる。こうした背景から、情報処理技術の導入が検討され、環境を整備するという流れはなかった。

このような状況の中において、パーソナルコンピュータと呼ばれる

小型コンピュータが、ハードウェアとソフトウェアの両方の面において急速な進歩を遂げ、かつては、中・大型の計算機でなければ為し得なかった大掛かりな作業を、個人レベルでできるようになった。これにより、本研究では、書学における現状、研究機関などからの支援が得られない状態においても、コンピュータシステムの自己投資により、具体的な資料整理の作業を前進させることができた。

しかしながら、本研究を進める中で行ってきたような、個人投資による研究環境は、依然として放置されたままであり、今後の課題として研究の背景に今尚、存在している。

第三節 研究の意義

本研究における研究意義は、第一に、伝聖徳太子筆『法華義疏』の書風を分析し、従来の研究では述べられていない、別人の筆跡、異筆の存在についてそれを指摘したことである。これは、本研究の独自性を示すものであり、先行研究に関し、それを証左すると共に、新たな解釈を加え、書学の今後に対し、一つの論点を示したものである。

第二に、『法華義疏』という研究対象の持つ広がりをも勘案し、書風分析と内容解釈の関係性を具体的に明らかにし、それが指し示している背景についての考察を行うことで、新たな研究方法論を提示したことである。

まず、異筆の発見という研究成果に至った背景には、これまでとは違う視点、遺品の見方がある。これまでの書学では取り上げられなかった遺品に目を向け、歴史的必然性を問うという方法論を採用することで、遺品に対する論点を換え、書風分析の意義を問い直した。

『法華義疏』は、註釈書という内容であり、表現の多様性に欠けるため、日本書道史において貴重な遺品であると認識されながらも、活発な議論が行われてこなかった。しかし、表現の多様性に欠けた、一貫した書きぶりであるが故に、丹念に調査することで、別人の筆跡を抽出、特定できたのである。

また、異筆と見られる箇所と内容解釈との関連性を分析し、書風分析が、他の分野にも影響をもたらすということについて論じた背景には、これまでとは違う研究の方法論が存在する。書学においてはこれまで、主に、字形についての解説や作品の優劣、芸術性を判断し、真偽を分明するということが行われており、それを論ずることで様式論としていた。

しかし、本研究では、文字の字形は歴史的意味を持つ一つの事象であ

るということを、様式論の中心に据えている。文字の形を分析していく中で、内在する情報を読みとり、関連事項について解析していくことで、書風分析のもたらす影響を分析し、書学の重要性を浮かび上がらせるという手法である。『法華義疏』を研究対象として取り上げ、異筆の発見と内容解釈との関連を示したことで、本研究の目指す様式論の意義を具体的に明らかにし、時代相の一側面を関連性の中に再構築したのである。

第三に、本研究では、論文の全体を通して、その構成の上から、論証の方法論を示したことが挙げられる。関連性を論文の形式として定着させるために、分析結果がもたらす影響を、論証のための立脚点として、仮説にまとめた。関連性を論文の形式として定着させることで、手法を研究方法論としてまとめ、様式論を確立させたのである。

第四に、『法華義疏』の書風を分析するにあたり、数万件という膨大な文字群の資料を有効に活用し、比較検討を行うためには、研究環境の整備が必要であると考え、文字資料を画像データ化し運用するデータベースの構築を実行した。これは、精緻な様式分析を行う過程で大きな障害となる、円滑な資料の整理と管理に関して、一つの可能性を指し示すものであり、研究成果を左右する資料の精度と、運用処理速度を高めることのできる具体的手段について、現在達成できる範囲の中で、実現させたものである。先に研究意義として述べた様式論を現実のものとし、書学を今後発展させるためにも、論証に使われた文字資料の提示は必須条件となると考える。

以上、本研究の意義について論述し、具体的論証を行うための背景と書学における位置づけを示した。

第四節 論文の構成

本研究における論文の構成は以下に示すものである。

第一章 序論

本研究の目的、背景、意義について述べ、方法論の模索と書学における位置付けを述べた。

第二章 原本の現状及び伝世の歴史的背景

研究対象である『法華義疏』に関し、伝世の歴史的背景について述べると共に、遺品の現状について論述し、本研究の調査に至る端緒となった要因について、その所在を明らかにする。

第三章 研究の方法

第一章で示した研究目的を達成していくために要求される、研究の方法論に関して論述を行う。本研究を進める上で行った具体的作業を研究フローとして表現し、流れに従って論述を行う。

第四章 書風に関する先行研究と本研究における仮説

書風に関する先行研究の内容を検討し、本研究との差異を分明し、それによって仮説を立てる。また、仮説が立証されることにより影響が生じる関連事項に対し、仮説立証後に再検討が必要となる項目を明確にする。

第五章 『法華義疏』所依の『法華経』並びに諸疏との関連とその解釈

『法華義疏』と諸疏との関連及びその解釈に関して論述を行い、先

行研究の問題点と本研究との関連を分析する。本研究の書風分析がもたらす意義を、具体的な事項に基づいて明らかにし、方法論の展開とする。

第六章 『法華義疏』に見られる改補修正貼紙の書風分析

第四章で明示した仮説に関する立証を行う。第三章で検討し構築したデータベースの画像を使いながら、論証を進めることで運用の評価を行う。

第七章 結論

本研究に関する結論をまとめて考察を行った。

- ①第六章の書風分析により論証された、異筆の発見と先行研究との関連。
- ②第五章と第六章から導き出される、『法華義疏』の解釈に関する疑念。
- ③結論の①, ②を導き出すに至った、新たな方法論の確立。
- ④第三章と第六章、及び補論から導き出される、研究環境整備としてのデータベースシステムの運用評価。

補論

本研究において構築した、「法華義疏画像データベース」の構造を明らかにする。また、『法華義疏』の画像データ化に関し、精度に対する妥当性について論述する。